第二百廿六號



する
する御



の庭

定價 一冊 金拾錢
六冊三ヶ月分 金五拾五錢
十二冊半年分 金壹圓
全國無遞送料

明治三十四年三月十九日印刷
明治三十四年三月二十日發行

編輯兼發行人 川崎直衛
印刷人 虫水巨雄

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
發行所 國光社

東京市京橋區南傳馬町一丁目七番地
發賣元 靜思館
（電話本局一千三百七番）

る御
部宛
に關
館宛
候也
一番地
郎

新撰女子書

本書の特色

女史久しく青山英和學校に在つて國語國文を敎撰す今回弊堂の需に應じて本書を著す雅俗其中を授び繁簡其宜を得たり四季の贈答吉凶の慶弔細かに文例を示すと數百題東久世伯の序あり爲堂翁の書式あり製裝美麗印刷鮮明實に女子用文中稀有の良冊と冊品ごし滿品讀々





拾六號

心（しん）

、所謂名譽といふものを攫取せむとわせる者ばかり、況んや、柔順を以つて處るべき婦人にして、猶、こが如きは、轉、惡ましくもなりぬぞかし。今更いふ名譽を得むがために齷齪して、故に得らるべきもの、惡德として排斥せざるべからざるものに屬す。彼人のために、さては、わが身のために盡したる所行賞、即ち、これ、名譽とすべきなり。方今、一の熱



牛の極めて小なるものとなし比較し調み…彼の紛…

及ばざること非常なるにあらずや。すべて。彼にあり

も偉大なるにあらず。他の名譽とする所も、我に於い

のなきにあらず。よく分別して、却つて其の身を汚さ

ことを望まざるを得ず。

所あり、婦容の婉娩なる、婦容の垢辱せざる、婦

容の端莊靜雅なる、婦人の爲には、貴ぶべきこと

に相違なしと雖も、…



次郎

九御、婦德、
言婉娩、又
はく、女有二四
婦容、四曰、

容の端莊靜雅なる、婦人の爲には、貴ぶべきこと
に相違なしと雖も、一向、之を以て、容貌の義とす
るときは、其の、容貌は其人の天賦にして、人力
に由て變易すべからざるもの多かるべし、又、其
の容貌をして、女子の女子たる風彩を、具へしむ
ることに至りては、多少の注意を要することなれ
ども、其事たる、單純にして、必しも、婦學の法
に由り、九嬪の敎へて九御の學ぶ程の、錯雜なる
ことに非ざるべし。近者、淸人兪樾の曲園全集
を閲するに、此事に付き一説を載せたり、其言に
曰、

節、學校にても、退の事より、賓むるが如き、其皆、夫々の作法、且又、茶湯のに外ならず、今の必要ありとすては、猶更、容

久の趣に比する

然として、長く、

き、一刻千金の時機を逸失する、恥多きには、及ばざるべし。況んや、壽長きは、恥辱のみを増加するに限らず、名譽も揚り、榮耀も受くるを得るあり。近くは、我が維新の史を顧みよ、年少の士にして、一朝國事に斃れけるものは、士ながら櫻花の嵐に逢ひぬる觀ありて、その散るは壯なりといへども、遺恨なしとせず。然るに、今日の元老諸氏のごときは、長く生命あればこそ、こよなき

如し。固より、効成るものは退くはよし、その効は以て、老を養ふに足ればなり。たとひ効なき老

こして、長く、
のすべきにあ
事の勤勉に意
し、早衰の患
めに、効を積
道を講じてこ
けれ。故に、
り。唯その人
一岐に分ると

は以て、老を養ふに足ればなり。たとひ効なき老人といへども、弱者をあはれむは、人道の愛なれば、老人を無用の長物視して、不親切に取扱ふものは、野蛮の風習といふべし。苟も、文明の民たるものは、我が家の老者は更なり、他家の老者といへども、敬意を以て、懇に慰めざるべからず。若し人の老を笑ひ、忽に扱ふものは、我が身も、早晩老いて、人より笑はるゝ悲境に陥るを知らざる愚物なり。あはれ、我に及ぶ老を忌むものは、亦、忌まるゝものぞかし。讀者よ、孝道は、社會



人のため、國の
り。壽長からざ
人分を全うせ
すべき所を得
唯一般にいふ
る、習慣を作
ず。これを換

勁武と、表裏相須ちて、人生の和樂昌榮を成す。是人性自然の差別にして、亦、我が祖宗の遺範なり。靜順に非ざれば、以て、一家團欒の和氣を整ふべからず、家内齊整にして、內顧の憂なからしむるにあらざれば、夫をして、其の本分を全うせしむることを得べからず。且、其の兒子を、膝下に養育し、眞個日本臣民たる性格を享有せしめんこと、一に、慈母の任務にあらざるはなし。

の名教なりとしるべし。凡そ、なれ過るにより、
自然と心安さに、ふし〴〵おこりて、夫婦の、間



…翁公
然るに、そ
は、いかにぞ
し、父子、君
其の間した

自然と心安さに、ふしぐおこりて、夫婦の、間讐敵の如きに至るあり。家禮にもいへるが如く、婦は、必我より目下の方より迎ふべしといへり。しかるに、今は、我よりも高貴の家の女をめとり、あまつさへ、財寶をこひ、土木の直をこふ。こゝによりて、その婦も、かならず、驕戻にして、常にほこる意あり、夫は、これを屈せんと思ひ、婦は、これにほこらんと思ひ候。そのうへ、あれ過るに至りては、妬心をおこし、大に、家内治らざるに至るべし。さて、古より英雄豪傑の士、女に

けども、よぢ
相をふむの漸を
隋の文帝の如
亂し、ぞかし。
し、和順なるを
、願ひ等奥より
たいてい理な
に候て、奥向よ
穀の高も、思の
凶年うち續き

せん女

田島利三郎

下野國那須郡高久組なる火鑓村にすめる、源五郎といへる人の母、せん女が行爲は、いと潔く、あはれ、後の人の鑑とも爲まはしかり。

性來慈悲ふかゝりければ、わが資力の能ふかぎりは、米穀といはず、金錢といはず、貧しき人には施與し、然もならぬ人には、利足をはぶきて貸與から詫びて歸しければ、其の志に感じて、涙をお
とし、男さへ少っ

高も　思の
年うち積き
は多けれど、
し。勿論、か
あき人なれ
べければ、
が身の糊口
、うつくし
をのみなげ
ん女に聞え
一日、其等

から詫ひて歸しければ、其の志に感じて、涙をお、
とし丶男さへ少からざりきとぞ。
それのみならず、としごろ、貧しきもの丶女をば
養ひとり、成長を待たて、人に嫁がせ、または、
牛馬を數多く飼置きて、持たぬものにつかはせな
どしけり。
領主これを傳聞きて、いたく感賞し、天明四年十
二月に、金若干を賜ひ、其の上、この時分には百
姓の身にては、容易にゆるさるまじき絹の衣服を、
老を養ふ爲にとて、ゆるされきといふ。
何の會、くれの集會を、慈悲ふかげなる企圖のわ

か稱さうと思
も、我が身ひと
、人にはほどこ
のかひかあらん。
け、又、急難の

御ひぢのかゝり、つねぐ\、こはぐ\しく、かた
のわたりきらく\として、たちゐやすからず。又
は、人のざしきなどにて、したしうなれむつる、
人々などの、御衣のつまひきとゞめ、ちとのほど
物申さんなどいふに、けんそにひとはなち、また、
あふまじきものなどのやうに通りなん、いやしく、
あらく\しく、見にくきわざなりけり。など、し
づかに、おにとなうたちやすらひて、御きゝ候へ。

きひまになん。
くやうにて、し

いでたるなん、いみじう見ぐるしき物にて侍り。
ことに、わかなども付きみれ、

やうにて、し
ひろらかに、
〳〵と御むね
ろ〳〵のけぢ
ちのどかに、
どけなく、も
べき。こせこ
かならず、つ

ことに、わかなども付きみいれ、ことに見苦しきこと侍りぬべし。それは御心にかけて、よく〳〵、御かほもちあら〳〵しくうちなり、ふた〳〵とさせおはしまさずば、おのづから、よく候ふべきかと思ひまひらせ候。

九　御ぐしのかゝりの事

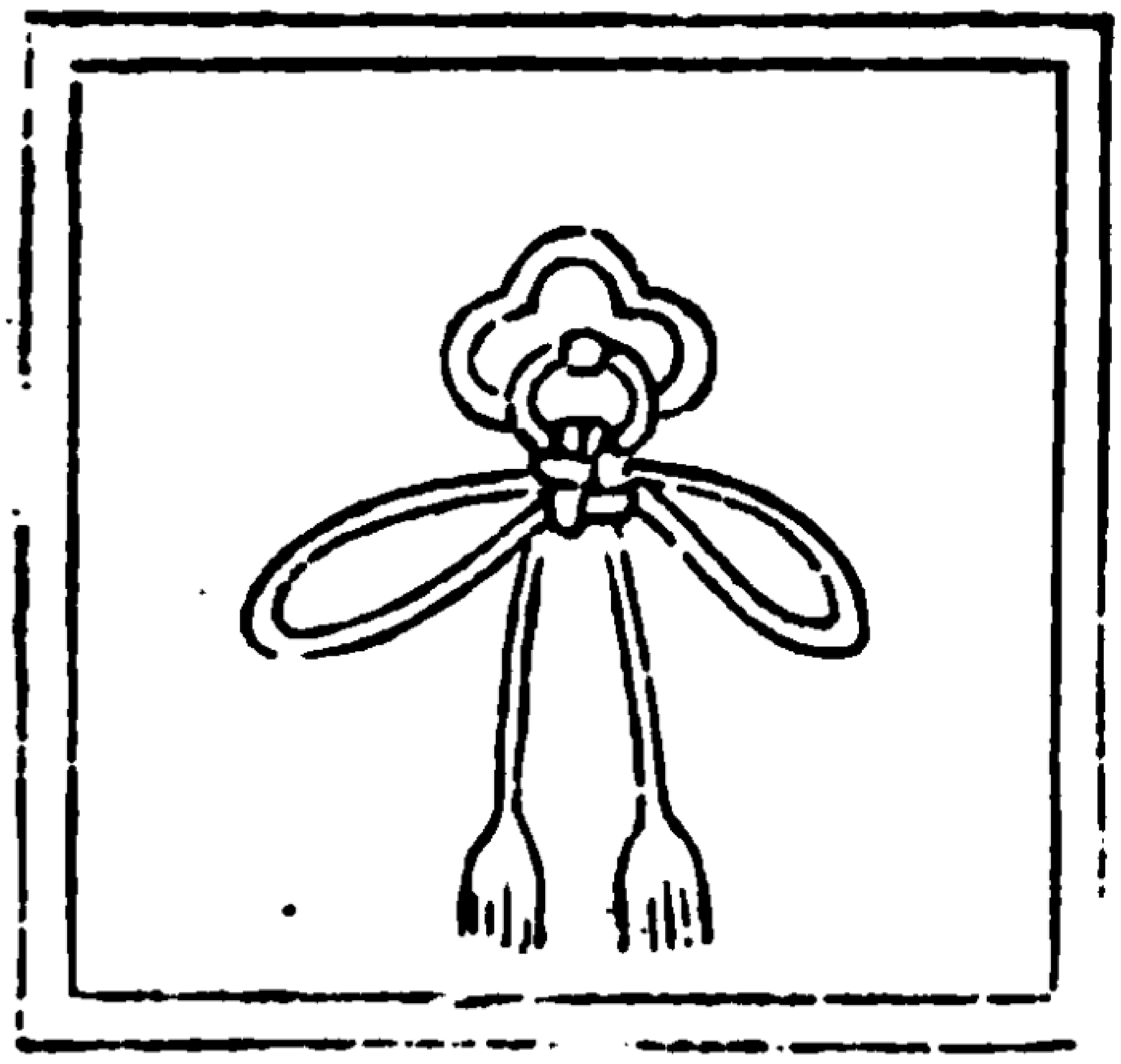
御ぐしは、人のかしらつきよりはじめ、かたのわたりよりぞ、よくもあしくもなりぬる。その御こころにふかく御たしなみ候うて、御ぐしを結はせらるゝ時、おんかまちのなかを御もち候うて、す

泰次郎

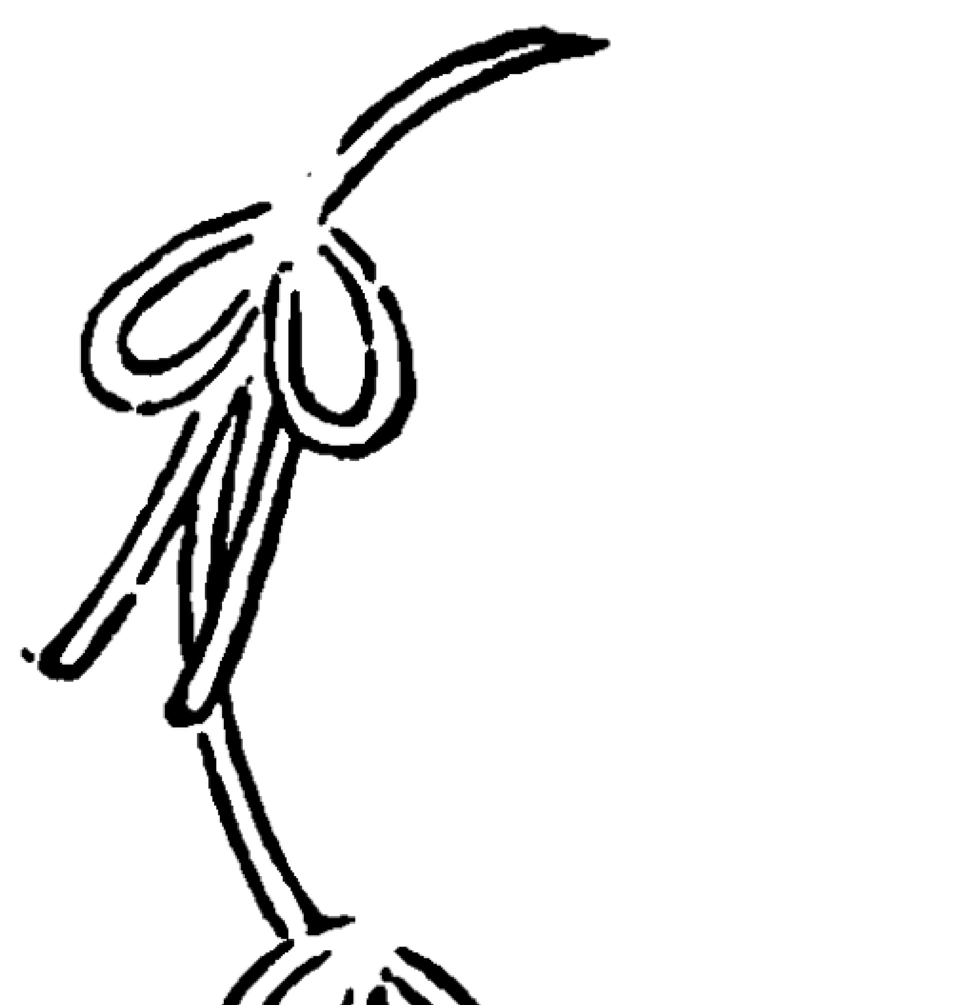
いたる結あり。粧をとて、其用
田の様は、皆人最も正しきを

第一　類聚雜要鈔繪圖四卷の内（心葉　藥餝　厨子　釣香爐）

心葉　是は盤の心葉なり
上巻手長一寸末垂二寸



餝　是は藥餝也
上巻手長一寸末三寸



三食となりたることとならん、茶事も是に伴はれ
て晝の茶といふは、正午十

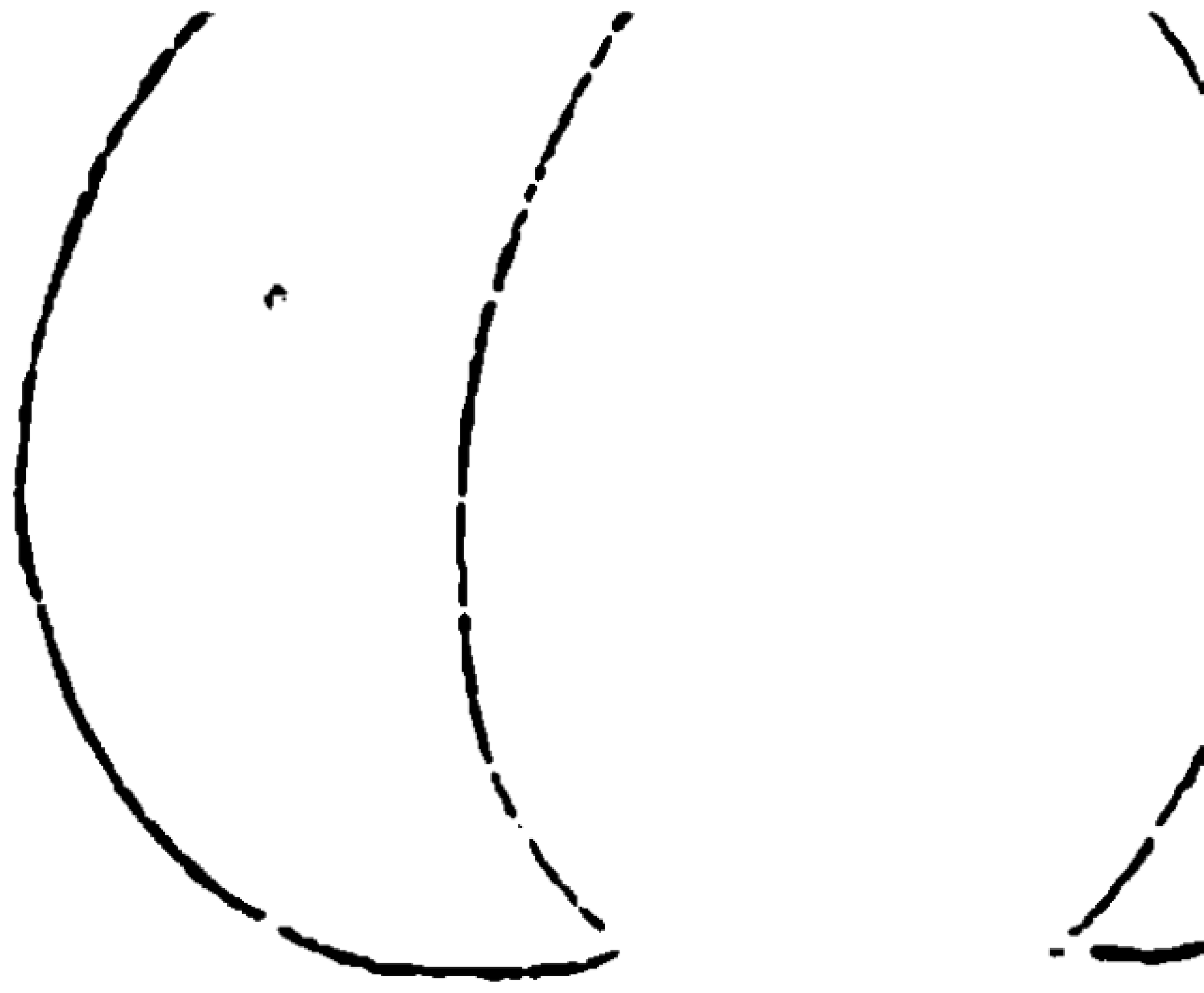
葦雄

巳の刻頃を晝
ゆへ、晝の茶
當時は一日に

三食となりたることなりし、茶事も是に倣はれて晝の茶といふは、正午十時と定りたるものなり。

附言、此邊の箇條は、茶禮初學と自然重複の事もあらん歟なれ共、原本の儘なれば、私に變更する事を不レ許、觀覽の諸媛、此邊を心裡に解し給はゞ、或は、又、參考の一端ともなるあらん。爰に、爲レ念御斷仕置候。

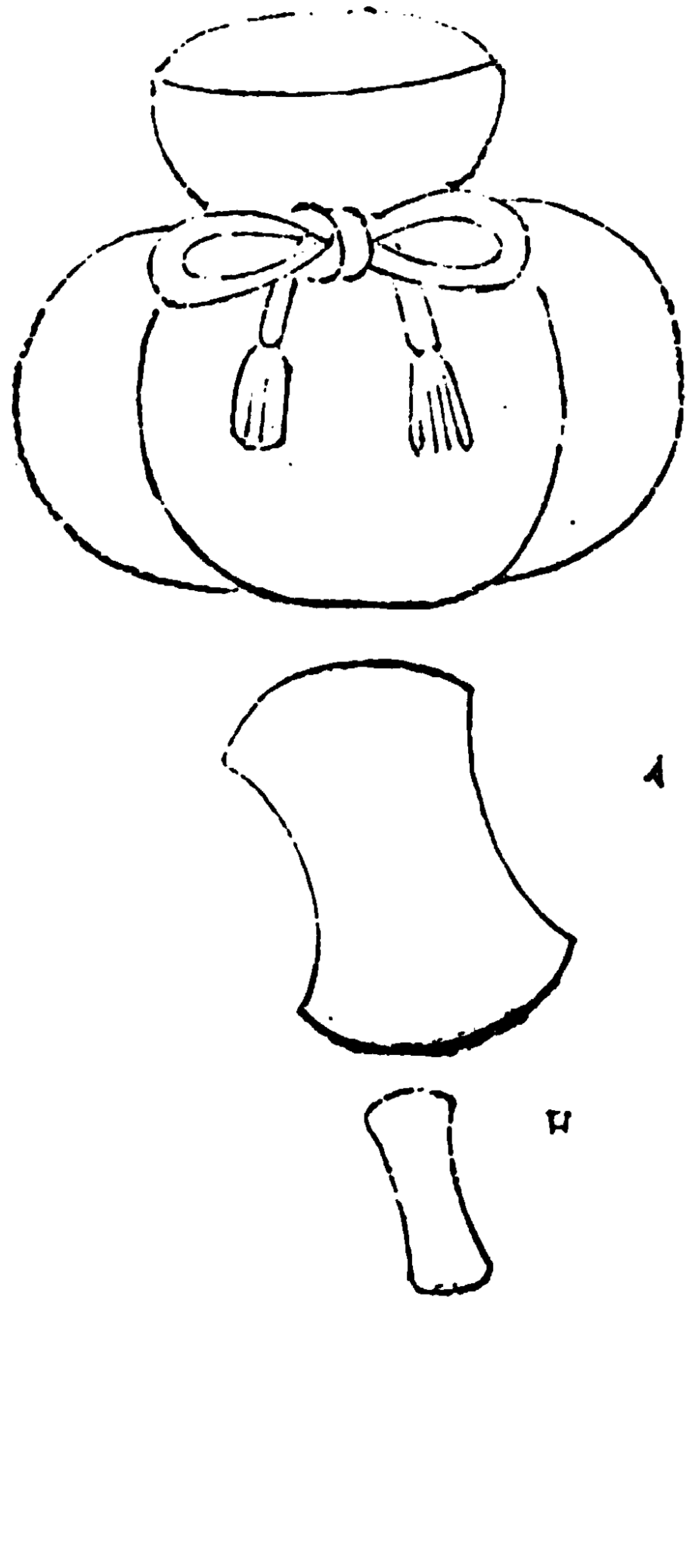
たちぬひ



二重して　きるへくとめたる相合につくるへし

その圖

福包(ふくつゝみ)



イ

ロ

イロハの印(しるし)のあに緋(ひ)の錦切(きんきれ)をはわりにてはりつ

しある方(はう)に線(せん)　両側(りやうがは)より焼(やき)て、木(き)の芽(め)味噌(みそ)、又(また)はふき味噌(みそ)なと、つ

を、裏(うら)にかへしつけて、

しおる方に緑
裏にかへし
ずして、切を
眞中を、切
べし。大きさ

兩側より焼て、木の芽味噌、又はふき味噌なと、つけて、さつと、火にあて、用ゆべし。

蛤臭あへ

前の如く、蛤を、湯がきて、水氣を去り、葱を、生にて、こまかに、きざみ、擂鉢にて、よくすり、白味噌を裏漉にて、こし、能程に、いれ、味淋の、煮きりて加へ、鹽梅し、木くらげ、香たけ、杯あしらいに、いれて、あへるもよろし。

蛤黄身あへ

さつと湯煮したる、蛤に、薄く味をつけ、鷄卵を、湯でたるを、黄身ばかり、とり、鹽味淋にて、味

りて、下を、

ば、暫み

し。求め多

、臨な養

し。

紫式部日記講義(十)

八月二十日あまりの程よりは、かんたちめ、殿上人ども、さるべきは、みな、とのゐがちにて、はしのうへ、たいのすのこなどに、みなうたゝねをしつゝ、はかなうあそびあかす。こと、ふえの音などには、たど／＼しきわかうどたちの、とねあらそひ、いまやううたども、所につけては、をかしかりけり。

○たいのすのこ　對の事は、上に述べたり。す
のこは、簀子にて、縁側な

經、左兵衛督、
てびたまふ夜も

左兵衛督
ひたまふ夜も
、上達部と稱
上の公卿をい
いふ。昇殿は
、當時、うち
、六位といへ
上を聴された

○たいのすのこ　對の事は、上に述べたり。すのこは、簀子にて、椽側なり。

○はかなうあそびあかす　はかなうとは、確としたる事の意なり。たゞ何となく、琴をひき、笛をふきて、あそびたはむれて夜を明すとなり。當時あそびといへば歌舞音樂のことにさだまりたり。

○たどゝしき　こゝは俗に、不調法、また、不器用などいふ意なり。

○とねおらそひ　當時の一種の遊戯にて、その遊び方、つまびらかならず。藤井高尙翁は、今

も、また、十二
れば源平盛衰記
は

に、吉野法師、

人たちが退屈
るべし。いかに

冬もすゑに　ありぬれば
法師も紅葉も　流れたり

さて、宿直の人々が、笛吹き琴彈きて遊ぶ中に
無藝の若人はいかに、榮花物語、初花の卷に、
このくだりの事を記して
そこはかとなき、わかき人だちなどは、讀經
あらそひ、いまやうたども、聲をあはせな
どしつゝ、ろんじたまふもをかし。

經房は、西宮左大臣高明親王の二男にて。母は、
九條師輔公の女なり。經房

…し。いかに
…宮にて、大
は、一條太政
民部卿なり
將は、左近
いふ。宰相と
相とあれば
いとまぎらは

九條師輔公の女なり。經房を、扶本、村本、一本等に、種房に作れるは非なり。今、類本、傍本、田本、岸本、一本、及び、公卿補任等によりて改む。

○左兵衛督　左兵衛の督は、實成なり。實成は閑院の太政大臣公季公の一男にて、母は、有明親王の女なり、左兵衛の、左の字は、もとなかりしを、田本、岸本、および榮花物語等によりて補ひつ。

○みのゝ少將なりまさ　みのゝ少將は、美濃の

信、左ノ宰相中
兼近衛の少將
に、管絃の遊

と謂ふあり。然
は非ず、何を

快矣。然則快之本在心。而不在身。故快字從心。君子先心之快。而後身之快。故心常快焉。而終身不失身之快矣。小人昧身之快。而不顧心之快否。故心益不快。而身之快亦隨亡矣。君子小人之辨。在決其所快之先後而已。故快字又從夬。

快を好み不快を惡むは人の常情なり。何をか快と謂ふ。聽くところ耳に適し、視るところ目に適し齅、且食ふところ、鼻と口とに適し、四體百骸、

す。快とは、心持のよいことで、其快と云ふ文字
て就て、解說し

…者…然

非ず、何を

如あれば、

如あれば、心

されば、則ち

快に歸す。

身にあらず。

の快を先にし

常に快し。

は身の快を

す、故に心益

す、快とは、心持のよいことで、其快と云ふ文字に就て、解説したものでありますからして、快字説と申したものであります。

偖快の心持のよきことを好みすぎて、心持のよかならぬことを、悪み嫌ふと云ふことは、人間の普通の人情でありますのぢや（也は助字にて、決語あり）が、何謂レ快で、されば、其心持のよいと云ふは。何物を指して申しましたのであるかと云ふと（上文を承けて、何謂レ快所レ聽云々と、假に自問自答したものであります）聽く所の聲が、耳に適して、聽度と思ふ好き聲であり。視る所の色が目に

所のものあき、
字は、上文に
もサレドモと
ましたもので
是は身體の快樂
ラバ、何か心
謂心之快、
あり）惡のワ

て移らざるの意ある時に、用ふる助字であります
又善のヨキコトを。好みスクことは好色のスキナ
よき色を視ることを、スクが如くに、シンカラ善
事を好みスキますときは、心が則ソノトキは、
心持がよい、（惡レ惡如二惡臭一。好レ善如二好色一。の二句
は、大學に如レ惡二惡臭一。如レ好二好色一。とあるに
本づく）心が苟もカリソメにも、快よしと思は
ずして、何か心に不滿のことがありますときには

以て心持のよ　くして、心に在るものであります。故て
不愉快ニ歸シ

以て心持のよ
不愉快に歸し
は、身がこゝ
を視、好き匂
持のものに觸
來ずして、心
も。愉快と思
テミルトキニ
に轉ずるの辭
ものは、心に
でない、古人

くして、心に在るものであります。故にソ.ウィッ
ワケでありますからして、快と申します字體は、
心の字に從ふて、立心邊にありて居りますので、
快樂は心を以て、本となすものであります、から、
心邊に從ふて、字を製したもので、製字の意を
推てみても、快樂は心を以て、本とすることがワ
カル。(故快字の一句は、直に製字の意に推原し
て、快樂と云ふものは、心を以て本となすことを
解說したものであります)賢人君子の、道に明か
なるの人は、快樂の本は、心に在ることを知りて
居るものでありますから、心に疾しきことがなく

し。（肆は恣に同
キマ、にする
放題に、シタ
しきことがなく
顧みて、愉快
かりてみない。
楽にして、快樂
よいと、思ふ

に適し。嗅且食ふ所は鼻と口とに適し、觸る所は四体に適するの、慾を極めても、ホントウニ、身に愉快な樂みを、受ることが出來ぬ。世間の酒色に溺れ、口腹の慾に狥ふて、驕奢を極めながら、却て心廣く体胖なる不レ能して、眞實の至樂を、覺ふることなきものは、皆此心の快否を顧みずして、徒らに、身の快を肆にするからであります、ソコデ、心の快と、身の快との、何れを先にし、

ルも必要なので

分ち決することにて、快とする所の

も必要なので
無徳の小人と
ものは、其自
先後のさきと
ノカッことな
るに在るのみ
決して、心の
は、君子の人
心の快を後
快を先にし後
るゝのぢや。

分ち決することにて、快とする所の先後を決せねば、眞實の快樂を。得ることが出得ず。又其決する所の先後如何によりて、君子と小人との差別が、分れてくるものであるから、分決の意味を持ちて居る所の、夬の字に從ふてをるのであると、茲所も、亦、上の故快ノ字ヘ從レ心ニの句意と同じく快字の製字の意に本づき、快字に、其快とする所の先後を決するの意あることを、解説いたしましたものであります。(易傳に、夬決也とあり、分決するの義なり)

やまの端

々木高行

にほへる

崎正風

しける哉

島直大

くらん

葉亂月

月夜に花を見て　　松浦詮

咲花のいろはわかねとつきかけの
おほろけならすにほふ夜半哉

春月　　宮地嚴夫

春ふかくかすみこめたるなか空に
わりとはかりの月のかけかな

春雁離々　　北郷久政

つはものは野へに伏ても在ぬ世に

折花贈人　　大谷章子

い

くらん

葉胤明

るかな

賀隨子

るかな

島榮子

りける

田朗子

折花贈人　大谷章子

いまはたゝ折て贈らんさくらはな
共にみん日のいつとしらねは

霞中雲雀　松平健子

落かゝる夕日のうへにこゑはして
わかる雲雀のかけそかすめる

月前花　常盤井文子

おほろなる月もこすゑにみえ初て
立さりかたきはなのかけかな

春雲　原田蒼生子

根芹つむ野澤のみつにかけうつる

つき
を見て
にかな

日忠彦

山水

月瀬雜首のうち

讃岐　小西甚之助

入月瀬

是よりそ月の瀬村と書く札の
あかしに立つか二本の梅

尾山

仰き見れは巖も匂ひ俯し見れは

見返坂

曳く杖もわかぬながめにとゞし哉

き哉、

か香

曳く杖もあかぬながめにとゞむ哉
善きやまみづを見返の坂

花の錦

松浦辰男

四月一日嵯峨従一位君の西京へゆかせたまふを送り侍るとて

こゝにこそ別れを惜しめ故郷の
櫻はゑみて君をまつらん

峯の櫻風にちる

…廣ぶた、或ひ
。扇子なども、
より渡す事わら
を執り、地紙の
左をひくゝし
をふせて、中ほ
ぜ、右の掌に
。さて、左手をふ

、又は、熱きも
すべし。
と

渡すべし。受取ものは、右の掌をあふのけて、
中ほどを執り、そと右手をかへし、左手にて根の
方を持つべし。
一、臺火斗に、火を入れたるを、渡すには、右手
に柄と、火筋を持そへ、さて左手に臺をうけて持
受取る人の前にて、下に置き柄を向ふにむけ直し
火筋を右の掌にのせ渡すべし。火筋の先きを、
我方にして渡すべし。受取るものは、大方渡し人

のあたりを右手にて、抱ゆる樣躰に持つ事、渡し
方の樣に同じ、唯左右の替ら…
一

琴は　熱
べし。
すべし。受取
したへさし入
そふべし。凡
つると口ある
、おぞは左の
也。但し熱湯
へて、そのう
包、式の如くし

のあたりを右手にて、抱ゆる様躰に持つ事、渡し
方の様に同じ、唯左右の替るまでなり。さて御前・
に参り下へ置き、音穴より柱包を取り出し、天
人坐の上に置き、両掌をわふのけ、筝を少しお
し進めて、退くべし。もし柱を袋に入てあるとき
は、筝を渡すとき、柱袋を懐中より出して渡す
べし、受取る人はうけて、懐中帛を取出し、其
上におきて、筝を受取り柱袋を懐中し、帛を納
めて後、筝を持ち起つべし。御前にて、柱袋を
出し、天人座におく事、前に同じ、もし渡し方に
て、受取る人の弾く様にして渡さば、まづそのま

げ右手を前、尾にそへて、きあはる也。、右手に雲額参るべし。柱との心づかひにて、然るべ

みちをまなび、かしこきをうやまふこと、そのときにより、ところによれるは、みなまことなきひとなり。

こゝろきよければよろづのものゝかみにいて、ゆるやかなりたのしまざるべけんや。

わざにこゝろをつくすことなかれ。こゝろはたゞこゝろをきよむるにつくしつべし、こゝろはもと。なり、わざはすゑなり、わざのために、こゝろを

かみあり、こ
たましいきよ
のことを、し
くもとにさは
たもとをつと
のはかりびろ
めず、わあか

せはきより、ひろきにうつりいやしきより、たかきにのぼるすら、あれゆくひまはうと〱しきものあり、されば よろずのこと、はじめてをこし、またひさしきをわらたむるには、さはりあきことすくあからん、うのをこすこと、わらたむること。あをわぢはへて、わりしにまさりあば、をところかずして、とくべきことあり、つきひをふれば、かならずよし。

をもひをもはず、かたりもたし、うこきしつかあるにわたりて、ひとつのわさわり、これこゝろを

はあらねど、き
はまされるもの
みちは、きよき
とにおろそかな
ひのとよかにし
し。
すく〳〵をかそへ
をもはさるへ

つゞし、、ら

こゝろきよければ、やすくしつけくして、ねにあるなり、うきてあはたゝしきはあやうし

まなふこともまめやかにしてやまざるものは、もゝのわづらひかならすいゆ、いかばかりすこよかなるも、つや〳〵まなぶことをこのまずして、のちにやまひすくなきはありし。

こゝろきよければ、つや〳〵ほかにむさぼゝすし

ひとをきよむるものは、いやあるなり、つやう

をもはさるへ
ことをほくは
り、これその
すしてしかあ
こと、たゝに
ゝろさときか
これるものは
かなり、かれ
やすかゝす、

ひとをきよむるものは、いやあるなり、いやある
ときは、かたちくたりてこゝろにかし、これこゝ
ろよきかわさあり。
わかみちは。いかゝすうれへす、よろこはしきに
いて、きよきこゝろをやしあふことつねなりとは
いへと、いかりぬへく、うれふへきを、しのひざ
るも、またみちなりいかりうれふるゆへありとは
いへと、しのひぬ。へきをしのひさらんは、また
みちにあらすとするみちあり。
つねにいもほりつゝしむとは、こゝろをきよむる

しなふべからず、
なかれ、きよか
のめかしうする
す、をのづから
きことのいたり
にあまりて、さ
しかもしみつけ
や、はらへるこ
とあみすると、

ふ、とることをなしければ、みなもとしつかあら
す、されはられへすわすれすをあしか、すして、
た、まめやかにきかめつへし。
こ、ろまことにむなしからば、つとめてこれをはら
へるのちにわきまへしてとありあんや、いかばか
りはらへど、をぼゆるこ、のたゑてあきにあらぬ
は、そのみあもとのまことにむあしからぬがゆへ
あり、またむなしきときはあきらかありとす、あ

部の婦人が初めて婦人倶樂部を組織し此に相會し
て文學上の研究をなす

はらへるこ
あみすると、
、まことにわ
ーー!...

直方

短を以つて。反省
この感をなすべか

部の婦人が初めて婦人倶樂部を組織し此に相會して文學上の研究をなさんとするや批難の聲は四方に起れり

然れ共有爲活達の米國婦人は毫も是等の批難に頓着する所なく唯最には其の實非なりしも其の名に於ては咎むるに足るものなしとし遂に儼然たる婦人倶樂部は組織され文學上の研究も開始せられ一致の娯樂も行はるゝに至りぬ既にして頗る好結果を來たし數年ならずして幾個の婦人倶樂部は現出せり

當初の目的は單に文學上の研究位なりしも斯く倶

つ舊式の薫陶を
く新文明風に化
を老婦人より習
樂部の定期集會
たるもの亦其の

ある洋服に比す
か從來好奇に富

大に婦人間の喝采を博し今は之を持たざる婦人は交際社會に幅が利かぬ迄に立到れりと云ふ其の原料は多き様なるも皮剥がるゝ人は極めて少きため價格は随分高直のものとか

（其八）米國婦人の奇習（下）

近時同國婦人間には日本服を着用すると流行し初めたり开は一定の業務に服したる後或は浴後夜間等總べて室内偃居の時には誠に着心地好く殊に[illegible]

萬治四年（寛文元年）の刊行なり。群書一覽
とは、「[illegible]

の洋服に比す
從來好奇に富
流行物とはな
物にして華麗
習に於て例の
し出席し一時
しが遂に交際
りしも平生偃
傾あり然れ
るは恰も日本
あらず

萬治四年（寛文元年）の刊行なり。群書一覽には、「作者詳ならず、卷末に藤原大貳作とし るせり、北村季吟自筆にてかけるを板行せり、卷尾に同人の跋有」と見えたり。さて此書の跋には、左の如くあり。

上略此ころ或人のもとより、かり出にけるをみなへしといふ草紙は、源氏さころもなどやうに、名たかき物とはきこえねど、ふるき女の歌さならぬ、言の葉をもかきつらねつゝ、ひとへに我どちのめのわらはに、戒をたれきこえつる、何れの御時、いかなる人の作り

物語類、その
書の中より、女
るべきを拾ひ、
女訓書としては
ば、此書最
一巻
臣、久兵衛と稱

書は都鄙至る所にありて、その內容は皆人の知
る所あり。

女大學寶箱（繪入）　一巻

文久三年の刊行あり。益軒の女大學を本にして卷の首尾、又上段に、婦人世繼草、婦人產前の次第、仝產後の養生、小兒養草、仝急病妙藥、二十四孝和解など、種々女の心得を書き記し、繪を入れたり。跋に『貝原先生の述作女大學とて、ある方にひめ置れしを求得、源氏物



いへらく、
のば　こぞもおもほゆ
りはめば　ましてしぬばゆ
いづくよりきたりしものぞ
かひに　もとなかゝりて　やすいしなさぬ
ねも　こかねも　はなも　なにせんに
まされる　たから　こに　しかめやも

柔、こと〴〵く

陋を忘て、梓にちりばめ、

こと〴〵く
…ならし』とな

一巻

渡邊先生在世
しと、賢き人
子に書贈玉ひ
門の教誡なれ
世に廣して
たちの、切に
愚蒙短才の

陋を忘て、梓にちりはみぬ、洛陽陋生、植村玉枝子編述』と見えたり。さて渡邊先生とはいかなる人なりや、又漢文字に書たる女中庸とは、いかなるものなりやを知らず、且植村玉枝子といふ人の傳は、未だ詳にせず。此解題に付きては、特に予の寡聞の罪を謝せずばならず。

此書開巻、まづ舅姑に事ふべき心得を述べ次に夫に從ふべき道を説き、次に婦徳、婦言、婦容婦功の四行をおかし、其他女子の常に嗜むべき行ひ、誡むべき事がらを、次々書き記せり。舊來は、貝原氏の女大學と[illegible]、此書の世に行

つりけむくいはでは、るに聞えて、みいつより云によりて、雄にや。そも〳〵みのさまを、けれ。かく疎

今いかにして稱へし事はあらざりけむ。後に雄畧の御諡を奉りしも、かの有德天皇と稱へし如く、威德猛烈の君なれば、雄略とは稱へしなめれど、猪のことによれるにあらず。さるを、御稜威よりと詠みては、たゞ、此の猪にのみかゝりて、譽奉るに似て、なか〳〵に、みいづを虧くものなり。畢竟、史の事實に疎くてたしかなる見解なきゆゑなるべし。

小子部須賀留

●のこと
、手とりには
りたるあるべ
しとはいふべ
はしけむ
しは、法興寺

なり。四句、深きこゝろも、結句とりかはしも
ふつゞかなり。

伊企儺

いたづらにいきながらへばから國に
大和心の名をたてめやも

大和心の名とは、いかでかいふべき。此は、詞
のはたらきしらぬといふべし

大葉子

をゝしくも散りにけるかなをみなへし
しらぬしらきの風になびかで

ありけめ
あきといへるは
をやこりていし
みさをよりこそ
ちがたし。

——

假髪を發明し、

す、相携へて、跡を

氷解せられぬ、即ち嘗て厚倉氏より、三勝が身の價ありとて、暗に取らせし金を、平三がもたりしかば、一時之を借りて、半七が疾を救ふこと、あしゝかば、日ならずして癒えぬ、見も知らぬ鎌倉に行かんよりは、浪華こそよからめとて、それより皆諸共に、信濃の沓掛を出發して、浪華に赴き長町といふ處に家を借りて、平三が俳優の道にかしこきから、鬘の事に精しきを利用し、入髪とい

髮を發明し、
ひの外に買ふ
百簑鬘を作り
呼びにける。
假髮を商ふわ
大和なる園
その消息な
じ、其の貞操
りざりき、且

ず、相携へて、跡をくらます者か、などおもひつづくるにつけても、病はいよよ重りて、涙痕點々として乾く時なかりき、之に對する、典膳敷浪の兩親のうれひは、ひとかたならざりき、只半七父子の事を、にくみ罵る時は、却りてその病を增すのみにて、半七が事を斷念せしめんとするに、その方策絶えて施す道なかりしかば、すべなくて、憤を忍びて半七が事を云ひも罵らずなりぬ。園花はまた、五條の家に蟄居を命ぜられたる、舅半六に、屢々消息して、その安否をとひ、日頃たし

…は商人とあり
…ものをひさぎ
ことしは六歳
…里へは、十里
…も憚らぬ烏滸
沙汰するに、園
…あきをよろこ
…たへ聞かば、

るよしもがあと、心中に祈りつゞけて、いと心ぐるしと悲みぬ。
園花が描ける苦心は違はざりき、典膳夫婦は果して此のよしをきゝて大に怒り、相議して年來の鬱憤をはらさんは、此の一擧にありと思ひぬ、云々の大事を下女は立ちぎゝて、園花にかくと告げぬ
園花は悵然として悲泣し、潸然として涕涙の情に堪へず、遂に決然心を定め、身を殺して志を全

としては最大重事にして、決…

逢はず、今は只こ
来のまごゝろなも
れば、氣色にも
目の霰も吹きは
き出でい、そさ行
紊亂したる鬢の毛
にぐにはふり落つ
夫の紋さわが
こふる筆の、命毛
なげきもさこそさ

としては最大重事にして、決して小事に非ず、廟堂に立ちて、天下の耳目を動かさぬのみにてこそあれ、このくだりを讀みて、園花のために泣かざる者は必ず貞操の婦人に非ざるべし。園花つひに如何なる瀬にか立つらむ、乞ふその次をよめ。

（以下次號）

一夕話

大宮兵馬

に、父君は勤番し
御面影をだに、
く、病がちなり
にして、愛しみ給
〜人なみに生ひ

物語ども解き聞
よ、後の世の鑑

ものしたり、叔父君、己れにのたまへらく、汝は今より吾を父とも頼め、汝を生せりし人の、江戸にて身まかりし時、生ひさきに、いたく、心置きて亡からん後、いかでよきに、撫育みてよと、我れに與へらる、兄上に恩義を報いんは、只だ汝の身一つをかしづくに在りとて、いと情深く愛しまれ居立ち振舞ひより、凡て、女の心掟のかぎり、殘れる隈なく敎へ導き給ひき。

と日の給ひけらく、

語ども解き聞
後の世の鑑よ
じはかなふま

其の娘と馴れ
の小窓より、
叔父君の外の
はしたなく、
私はで、叔母
つねばこそと

と日の給ひけらく、三樹八郎が書は、いと美しくはあれど、女の手にはふさはしからず、巽太郎が書ける唐詩選の手本あり、常に之を習ふべし。また、歌書には、新葉集をば、常に繰返して見よ、此書に入りたるは、皆な南朝の方々の、御歌なれば、忘れても疊に下すなとのたまひき。

叔父君、諸藩の人々との交り、やう〳〵繁くなりもてゆき、出で入る人、常に絶えざりければ、己れが身も、取次歓待にいとまなかりき。其の來れりし、人々の名、大かたは、忘れにたれど、粟田

ち給ひし先妻の、
まり下り來て、叔
筆跡にも見ゆ、(此
は、常人には容易
藤森ぬしとは、
は、彼の月性法師
御目見え給ひぬ

言ひしに、叔父
言ひけ

其の聲の耳に入りしこそ、己れも嬉しかりしか。叔父君は、常に酒をたしなまれけるが、晩酌に醉ひうらげて、假寐せられたるありき。叔母上と共に、やをら寢所へかき持てゆけば、いと嬉しげなる、面持ちにておはしけり。己れはいと嬉しかりき。

或る時、安藤圭壽といふ人訪ひ來て、叔父君と、樣々の物語せらる、其の所に己れが在りしを見て、

ひしに、叔父
ひけん人、心
ひ消されてあ
は、其の首を
て、生涯其の
、また役に立
ひぬ。(安藤の
者のことなり
せられき。)後
しかば、果し



四月五日兼題

落花

天　小石川指ヶ谷町　池田愛子

山かぜのふきのまにまにしのすだれかゝるいはにもちるさくらかな

地　三河隨園社中　河合ぬひ子

をしみてもとまらぬ花としりながらことしもあかぬなげきをぞする

松永春子
かな　高石登代子
かな　名取正代子
けり　戸塚銕子
らむ　川村幸子
はな　鈴木かれ子
かな　山村友子
けり

しりてもかせをうらみぬるかな　徳永廣子

ちる花をゝしむこゝろはものうきに
はるをのさけくなにおもひけん　佐藤玄子

たちよりてあかぬいろ香の山さくら
ちりかふはなをゆきとなかめん　戸賀崎治子

ちりしける花にもこゝろしのはれて
はらひかれたるにはのおもかな　高橋松江子

おのつからちりゆく花としりなから
てふの羽かせもいとはれにけり　園田婦美子

きのふまてさかりゆかしみ見し花も
かせのまにくちりはてにけり　出やま子

よしの山ちるをも見よとさくらはな
うすくれなゐにはるかせやふく　山内きく子

諸ひさのこゝろもしらてはるかせに

野　きやう子
小野ひさ子
平俊子
春野むめ子
山下すな子
山下せい子
山下たつ子
山下まい子

なしめさもかひなきものゝ中々に
こゝろのはなもうつろひにけり　田村米子

なかなかにさけはかつちる山さくら
まつまそはなのいのちなりける　田村道子

ふみ分るあさ見ぬまてさくらはな
夜の間のかせにちりしきにけり　稲原菫子

ちりてゆく花なゝしむかさゝかにの
いさよりかけてさゝめかほなる　服部蔦子

こゝもみぬこゝろもなかき春の日に
こゝろみしかくはなのちるらむ　服部正子

ゆふまくれ風もふかぬにちるはなは
はるのあはれのかきりなりけり　森田さも子

さしくにさけるさくらの花なから
ちるをなしまぬひさなかりけり　三宅中枝子

春もやゝふかきみやまのさくらはな
ゆきさみるまてかせにちりぬる　春野はな子

あま人のしほくむそてもにほふらん　椎野ぬき子

中島ふみ子

すむ

幸村きよみ子

かな

森永米礎子

ゆき

澤田譲子

くれ

花の王とたゝへらるゝにことわりありかし。われ、こゝろなき花だにものがみさをゝまもり、おのがつとめをおこたらずして、よの人にもてはやさるゝものを、かへりみれば、人と生れしおのが身こそ、いとはづかしけれ。よし、人々のかゞみとまではならずとも、ひとたびは、花のごと、世ににほひ出て、ちる時はをしまれなんものぞ、庭のさくらを、みつゝ、いさゝか、こゝろにうかぶまゝをかくなん。

人

愛媛縣松山三番町　藤野節子

月花を見るにつけても、いとゞ、しのばるゝ我身

廿の昔なりけり。

かき父母の君に

出づるまでは、心なき賤の女ごも、

やがて

昔なりけり。
父母の君を
友垣ども打
とひしてけ
に、ゐひたま
めきおぞ、
電報々々の
く〳〵・是、
りし由云ひ
父母君の御
にに、悲しさ
こそ。
目とすぎさり

出づるまでは、心なき賤の女にも、今日かあすかと待ちわびられ、やがて、さきいづれば、犬追ふ里の童にさへ、こちたくもてはやされて、今こそ春と覺えつるまもなく、つれなき雨風にふきさらされ、束のまに色さめ、香さへうつろひて、あさましう見たてなき姿とかはりぬれば、はや、たえて見かへるみやひなだになきぞ、はかなくも、またかなしきかぎりなりや。

薩埵利榮子

軒端の梅は、漸く、香をば、送らずなりぬ。垣根の草も、稍、生ひ立ちぬ。百千鳥の聲、聞え初めて、來、夜を殘す霞の中より、雁の列の、渡り行くなど、長閑なる、曙のさま、えもいはれず、門の柳は、春風に、綠の髮を梳り、遠の山の麓には、霞かとばかり、花の咲き出でたるなど、萬、心も浮き立つまゝに、一日を野邊に、遊び暮さましとて、妹と共に家を出でぬ。うら〳〵と霞む、春の野を、同じ心の、乙女等が、我も我もと、花籠さげて、こゝかしこの畔道より、三々、五々の、群をなし、「春の彌生の 曙に」など歌ひ連れて、行く樣には、長閑さも一しほ

こそ、ありけれど、
に、感涙襟元を、
きて立ち上れば、
森のあなたの塒
又こそ來めと、
間なくゞる水の
ぬ。

原　蘭・子

、淡艶のかゝり
殊に此花や潔よ
れ、古も今も、
に、たとひめでた
あかぬ心地すれ
とも、清き色香

いつしかさ　春風の吹き通ひしより、青柳の糸の長閑に打けふり、こゝにかしこに、花のおとづれ聞ぬ日もなし。あゝ夕、庭面にさまよへば、今を盛りと、咲き亂れたる櫻の、いと艶にうるはしう、おぼろにかすむ、花の木の間を洩れて、おぞろげに昇る月の、いさらうたきに、これぞ我日の本の愛たき眺なりけると、猶去りもやらで、たゝづめば、何に誘はれてや、二ひら三ひら、袖の上に散る花、いと哀なり。かく計り、めでたく、吹き匂ふ花も、一夜の風に、さそはれなば、果敢なくもしぼみ落ちて、見かへる人だちになきぞ悲しき。實に、うつせみの、定めなき今の世は、富貴なれば、知る知らぬ人までも、こびへつらへども、一朝、不測の禍に遂ひて、身まづしうなれば、次第にうと〳〵しう成り、途には、道にて逢ふを、そしらぬ顔して行き過るなど、うたてく淺ましき世の樣よと、ひとり、花の下かげにかこつもせんなしや。

太田ため子

そほひぬる折ふ
、彼處やよけん
ろに、一人が、
、皆打ち逃れだ
人々なまつれる
あり。御社の前
ば、國の爲、君
逃ごものしのば
ゞ朝日に匂ふさ

見みい子

朝鮮國金山里といふ所の温泉にものして

在釜山港　長野孝子

釜山港より、道のほど四里ばかりへだゝりたる所の、金山里とて、出湯の里のありけるによりて、彼所に、おもむかばやと、思ひたち侍りて、十一月十二日の空いと晴わたり、風なぎて、春かとうたがはるゝ、ばかりの日に、準備とりいそぎ、午前八時ごろ家を立いで侍りぬ、この國は、いまだ汽車、あるは馬車の設けなく、只あやしげなる、輿と、いと弱く少なる馬と、あるのみなれば、姿は、韓國の馬にのりて、四方をうちながめて、ゆくほどに、やがて大なる、坂路ふたつばかり、越たるなりは、馬は、はやつかれたるさまにて、あゆみ、ゝにぶくなりければ、

のろ駒のあゆみおそきもうれしきは
ゆく手いそがぬ今日のやまみち

此所は、草梁といふ、監理署あり、監理は勅任官にして位は正三

…らん
あたみ
所に、草屋一二戸あり、
なりから馬子は、韓語
により、遙に森の方を
下りゆけば、左の方に
ばらに生て、木かげは、
右の方には、路より
のあはれなり、さらで
韓人のなりをり、ゆ
西行法師の鴫立澤の

こはかさ、歩行みるに、
跡の、古戦場さ、聞つ

ろさのたがひあるのみなり、町の中央に、城門あり、これより山の方に、高く築きあげたる石垣もみゆ、たづれさひたきこさも多けれど、いかにせん、馬子は韓人のこささて、言葉通ぜず、ここに賤夫なれば、古事などしろよしもあらねば、そのあらましを見つこゝをすぎさり　なほ半里ばかりにして、山湯のもさにつきしは、午後二時なりき、此の温泉に蓬萊湯の碑たてり此所には、釜山より、浴客のために設けたる、日本人の湯亭あり、客室も備はりて、不自由もおぼゆはべらず、やがて飯などすまして、湯坪にいたりみれば、いさきよき、汐泉にぞありける、彼の故國も、名にしおふ、山鹿温泉のある所なれは、

から國のいで湯をここにむすびては
わがふるささぞわきてこひしき

三四人の浴客の友も、多くは飯食の樂しみにかたふきやすくて、あ

いくさしつきが、

と、歩行みるに、
古戦場と、聞つ
を、たどり侍れ
恐みし、所なるべ
ゞきたる、左右
く、しげりあひ
、みな韓人の新
れるも、いと口
らまほしけれど、
女の只一人、な
きわざならじと、
、関を下れば、
を、ならべたる、

いくさしつゝか、ふるつかを、ふく木がらしに、ことゝへど、
さめてかへらぬ、もののふの、ゆめのあとこそ、なみだなり。
そのかみしのぶ、のちのよの、しるしとならん、おいまつを、
かまどのしたに、をりたきし、からくにびとぞ、おろかなる。

またの日、天氣うららかなりければ、出湯の西にあたりて、金山とて、岩山あり、ここをみばやと、おもひ、左方の小路より、のぼりゆきけるに、少の関あり、此所は韓人の葬にて、大小の石碑ありて、小松生たり、それより、畑畔の路をすぎゆきて、山のふもとに、つきぬ、(温泉より二丁ほどあり)しばらくやすらひ、四方をながむれば、東に小田をへだてゝ、東萊城の山ひろく、南に青海原、松の葉末に遠くつゞき、北に平地遠くひろくつゞきて、山のはは、うすくこく、いよいよ遠きは、雲かとうたがはれ、いとあかぬながめなり、此所は、都市に近けれど、日本とは、ちがひ、いと閑靜なり、山頂を、見あぐれば、岩角けはしく、けづりたるがごとく、白砂の、いとうつくしきあり、岩上には、人の造りなしたるごとき、松のおもしろく、生たり、此所より山のすそ野に

田よし子

君の、現世を去

り、はや五年祭を

思ひのまゝを

さゝげまつりぬ。

にはた山に。

ごゐだに。

けまくも。

りませし。

方言研究といふことは、語學者には勿論のこと、歴史家にも、教育家にも、さては小說家にも、苟も、その國の文學をしり、その國の文明をしりその國の言語風俗をしらんと欲するものには、決して輕んずべき事からではないのである。特に近來やかましくなつてをる、言文一致などいふ問題に向つては一層重大な關係をもつてをるべきことは、云ふ迄もない。今試に、この言文一致とい

假定せばい
を感ずると
誌前號に、
れたる、ガ
說教がガン
やうな話
ヘンのでお
も、私共
細に說明し
いのである

對談したといふことである。これは國訛の好例として、屢々人の云ふ事實であるが、交通便利の今日、まさかそれほどの奇談も起るまいけれども、兎に角、方言といふやつは、今なほ多少各地方に存じてをることは事實である、自白すれば、かく云ふ私は、所謂奥州の、ズーズー辨の一人である。若しも私をして、大膽にもこのズーズー辨の御國訛を、飾りなく談らしめたならば、熊本のバッテンクサイよりも、ガンスかガンヘンかよりも、更に奇撰なる言語が、羅列さるゝことを自證

ンネー、ヤッッの一と數へねばるかといへば、りそのまゝ採用れども、一も二でもない。中にもある。輕快な言葉も、をりを

は、私の一々取調たのではない。これは、綺語堂といッた、大阪の狂言作者が、今から凡そ五十年ほど前、即ち嘉永年中に江戸見物に來て、その時書いた、皇都午睡といふ旅日記の中に、散見してあるのを拾ひ、それに、大阪の人なる、私の友人にきいたのを、いさゝか書き加へたので、決してこれが、方言研究の材料でございなど云ふつもりで出したのではない。勿論、江戸と上方とを

、まだ〳〵
ふことは、
日では、明
堂の皇都午
、所謂遼東
なり方言を
でも出して
の種のをは

方言、これらの問題に向ッて、興味ある、しかも有益なる觀察をなり〳〵はもらし給へよ。私も、私の國の方言、即ち奥州訛に付いては、いさゝか調べかけてあるから、他日、本誌に掲げて御笑草に供するつもりである。

江戸ことば	上方(京坂)語
かッて來る(買ひて來る)	かうて來る
かりて來る(借りて來る)	かッて來る
恐ろしい	大さい
大層	仰山
だから(……にて有るが故に)	じやさかい

き
らげ
あさん
き
さん
やん
さ
す
ご
す

○撥ズルニ關東ニテハコノゴチハツキリ撥音スレドモ上方ニテハ柔カニヲトイフ

しばろ(結付ろ)	括くゝろ
ゆわへろ	結むすぶ
述懷(じゆつかい)	じゆツくわい
かんのん(觀音)	くわんのん
けんか(喧嘩)	けんくわ
やかん(藥鑵)	やくわん
かし(菓子)	くわし

○撥スルニ、關東ニテハ、スベテ字音ノ語ニ拗音ナシ、

しばや(演劇)	しばゐ
おツかない(可怖)	こわい

する

かつぐ

しよって行く(背負ヒテ行ク)

天秤棒(てんびんぼー)

たぼ(髱)

まげ(髷)

刷手先

たこ(紙鳶)

上げる

かさかぎ(梅毒)

こはす(破毀)

こはれる

わッち

いやだねー

荷(にな)ふ

せおうて行く

扐(おふこ)

つき

わけ

髪先

いか

のぼす

しッかき　又かさかき

くだく

つぶれる

私(わたし)

おゝすかん

…ねろ
…ない
…ない
…者
…の
…んだくれ
…い物
…う
…にしましよ
…にせい
…數
…往んごくれ

なめろ（瓶…	舐…
ごうらく（放蕩）	ごくごう
神さま佛さま	神さん佛さん
まき（薪）	たき割木（わりき）
殼消（からけし）	消炭
焚落し（たきおとし）	燃（おき）
佐倉炭	切炭
ざろ（笊）	いかき
たわし	切燧
おはち	飯櫃（めしびつ）
膳箱（ぜんばこ）	飯臺（はんだい）
さるぼ	片手桶

上方臥〇めりやす
お備(鏡餅)
胡麻揚〇あげ
雁もどき
おみおつけ
下地(したぢ)
おしたじ
かぶ
糸菜
芋莖(いもがら)
唐茄子
鴫燒
なまりぶし

端臥
お防餅
油揚
飛龍頭(ひりやうづ)
味噌汁
醬油
すまし
蕪(かぶら)
水菜
ずいき
南瓜
茄子田樂
生節(なまぶし)

豆
炊飯
ぎ(大阪)
羽
提灯
人
屋

さうもろこし
まい〳〵つぶれ(蝸牛)
わり下
にんじん(胡蘿蔔)
ごぼう(牛房)
きつね(狐)
お鉢
あなた(貴女)
あちら(彼方)
はらが立つ(立腹)
皮むき饅頭
湯屋

南蛮黍
でゞ虫、でん〳〵虫
だし
ねんじん
ごんぼ
けつね
お櫃
あんた
あーち
腹が煮える
おぼろ饅頭
風呂屋

ノ言チ忌ミ、皆

されば、はじめの夏とて、首夏、孟夏、初夏など、云ひ、又は、新しき夏とか、早き夏とか云ふ意にや、新夏とも、早夏とも、或は、節の名をもて、立夏とも云へり。

潛確類書曰、孟夏者日月會ニ于實沈ニ而斗建ス巳ニ之辰。

月令廣義曰、立夏四月節。孝經緯云、穀雨後十五日斗指ス巽ヲ爲ス立夏ト。

と、あるより起りたものにて、首夏、初夏、孟夏、など、皆共に、梁の元帝[illegible]

宮中所々の御
し、更衣と訓む
に、桐壺の更衣
みたさむらひけ
たる如く、漢の
時(三十五)及、
仁明帝の承
黑に、從四位下

衕記に、しらかさねと云ふは、更衣の事なり。卯の花の心か、面白く、裏も同じと、又一説には、總て、四季に隨て、衣を更る事あり。卯月朔日より袷を用ゐ、寒ければ下小袖を着す、是をしらかさねと云ふ。五月五日より、帷子を用ふ涼き時は、下衣を着す、是を一重かさねと云ふあり。夏なれど、帷子を二重着る作法にや、八月十五夜に、綿入ざる生絹を用ふ。九月九日より綿入たる衣なり、是を紅葉衣とも、菊衣とも

を用ふ、是
開きて風な
きて、恰も、
は、卯の花月
に、
まし

●●余月とは稱へ、西京雜記には、陽德事にかなひ、和氣皆陽たり、正陽月となすと、又、●●己月とは、晉書樂志に夏正は、寅に建り、正月となす、故に四月を巳となすと、あるより起る。

月令廣義曰、四月卦乾五陽決遇一陰陰變而爲純陽乾天也。

易經曰、純陽爲乾。

●●純陽といひ、●●乾月と云ふ、蓋て丶より出でたるならんか。●●跰踵と云ふもあり。史記の天官書に曰、

はりに
さばの月と訓む
藏玉に、
りはの月
乏月とか、又
冬至を一陽と

り
遠山にかゝる白雲は散りにし櫻のかたみに
て、青柳の糸亂だれける、池の邊の松が枝に、か
かれる藤波の、うら紫に咲ける色、青葉まじり
の遲櫻初花よりも珍らしく、峯の山吹さき亂れ、
八重立つ雲の絶間より、山郭公の一聲に、庭の卯
の花いと白う、一しほの肌自慢、そよ吹く風も香
を流す如く、水車に引ける水の邊、蛙漸く鳴出
して、未だ喧しからぬ程の、聲愛らしき夕、畑
打つ人の野歌の節緩く、句笑しきが、遠く霞みて

は、彼の俳仙、
木に竹をつぎ
己れ先つ頃、
にて、彼方の
に罵りけら

木村長門守重成

ぐすくだけ　サンドゥ

父は木村常陸介と申しまして、関白秀次の股肱の臣。主人の御為にとて計らうたとの罪となりて、遂に自殺して卒いましたけれども、其の身は、幼き頃より、秀頼公の御側に仕へて、御覺も一方ならざりし木村長門守重成が、何事の粗忽あつたかは知れませんが、身分の卑い茶坊主づれに、稠座の中で、ぶち打擲されて居ります。





だ和睦も破れま
中です。
は、四千七百餘
した。藤堂新七
したが、重成は
敗し玄番を傷けて
から道明寺へ行
したから、直驀に

に廿一歳を一期として、秀頼公のために潔く討死いたしました。東北の豪傑伊達政宗、自この人の像を畫いて、子孫後世のかゞみに遺したといふことです。數萬の大軍をも、物の數とも爲ぬ重成が、何故、茶坊主ぐらゐに挑まれて、避けたのでせう。熟と考へて御覽なさい。實に人は皆、斯樣ありたいものでございます。

家十何代の後
も尊敬はれ、
照といふ方が
所の山へ狩に
が、途を踏迷

それは嘸御困りでございましたらう。イヤ、モウ、御城へ御連申しませう。だが、もしも、貴方が御歸にあつた時に、一番眞先に御城から出たものを私に下さるといふことを御約束していたゞかれるなら、私は、非常に喜んで御供いたしませう。

と申しました。何の譯もないことゝ、=斯の場合のことですから=、遂、思召したものですから、其の通、御約束をなさいまして、其の人に伴れら



御城では、殿様が二三日、何地へ御出になつたのか、御歸が御座いませんので、大騒で御座ります。今日も、皆家來衆手別しまして方々へ御行衛を尋ねにまゐりますし、御城では、「唯お一人の最愛の」御姫様、御父様の御上を案じて、居ても立つても居られません。御門の外へ出て見たり、城櫓の上に登つて見たり、氣も狂はんばかりでございます。やう／＼のことで、御歸城の御姿を見ましたから、飛んでまへりまして、御父上の袂にすがりつきま

彼の約束の言
愛の犬に、出
ら、お姫様は、
よりも犬が可
迎した方が、

とで御歸なされたのだに、斯様いふ御言ですもの。少し、はしたないやうだが、飛んで出たのも、無理ではなからうでは御坐いませんか。御怨言も御道理かとも思はれます。

御父様も、ハッと心づかれましたから、

姫なか〳〵、左様した心で言うたではない。實は、是々斯々の次第でと、彼の黒男と約束せられたことの一部始終を。シカシ『御父上も姫が心を察しては、今更、腸も斷れむばかり、さて、

、御心配おそは
す。
息ついて默つて
は、
ります。然らば、
しますから、
しまひました。
座いました、何
れうぞ。誠、む



自分も自殺す
ゃし、それ
たらよかから
もでざいまし
そばされて、
一旦、約束
がならず、か

りました。

野こし山越え、谷越えて、其の又おくの深山の奥。如何なところへ參りますのだらう。大熊は、たゞ一散に驅けてまゐります。（おあとモー一回）

何人が戰ひ、何人が倒るゝも、正義は、永へに勝ちて、斃ることなし。正義の味方に戰ふ者は、假令十度、百度居らるゝとも、神之に、勝利の桂冠を與へ給はん。（エマルソン）

…し仕　宮中に
分より御親祭、
りたり。今其次
各式部官、各掌
、皇靈殿の御裝
饌を供し。九時
殿神殿を開扉し、
準備整ふるや、
請に依り、德大

各々奉仕し次い　皇族　各大臣　樞密顧問官　公
侯爵、勅任官、麝香、錦鷄兩間祇侯參拜、次に
東遊の舞樂あり、次に宮內省奏任官、判任官の拜
禮あり、奏樂の間に一同退下、正午よりは、伯、
子、男、從二位以下、勳二等以下、神、佛各宗管
長等の參拜ありたり、當日、參內の亞もあるは、
各皇族殿下を始め、各大臣、樞密院議長、同顧問
官等、外文武高等官、有爵、有位者三百餘名なり
しとぞ、うけたまはりき。

し仰出されたる
時五十分青山
御車に召させ
あらせられ、
の供奉は、東
顧、同三島
及村木雅美の
家府知事、
奉送しまつ

●伏見宮御慶と儀仗兵

伏見宮禎子女王殿下が、本月六日、侯爵山内家へ御降嫁遊ばさるゝ次第は、前號にしるしゝ如くなるが、尚其後承はる處に據れば、同殿下の山内家へ入らせらるゝまでは、皇族の御資格なれば、萬事は御作法總て之れに準じ随て、御入輿當日は、半小隊の儀仗兵を、附せらるゝやに承はる。又、殿下の御館と、侯爵邸とは、僅々二三丁の距離にして、御行列には、餘り接近し過ぐるより、御入輿御道筋は、殊更に

趣得ひ云はれ尙も御足輕げに后宮亮、林直様が、御目に止り、問はせ給ひしに、恐懼して措く能近く寄り給ひて、の御物語あらせくしく思召す旨、

を問はす、貧しきとへせられ、それがため自然に、家庭の圓熟を缺くは、世の常あるが、茲に房州安房郡舟形町字西町に、魚仲買石井庄五郎の妻かね（三十五）といふ者あり。性質極めて温和にして、夫に貞節を盡すこと他に勝れたるが、夫に、かね（五十五）と呼ぶ繼母あり。五六年以前より、慢性の僂麻質斯に罹り、醫者にも診せしかど其の効なくて、身體は遂に不自由となり、之が爲めに儘ならぬ身體を怨みて、老の繰言、口數のみ多かるも、

〳〵しく勞り
とぞ。世の中
非人の多きに
も彼の名高き
夫と同じ縣下
野はるといふ
るが、頗る社
々同地支部、

れし際、御旅館費として、多額の金員を寄附した
ることあり。同地支部にては、婦人として誠に得
難き行ありとして、此程木杯一個に謝狀を添へて、
同女へ贈りたりとぞ。あはれ名譽のために、慈善
家をよそはふ人は、數多あれども、春子の如き、
人の少なきこそ、うたてけれ。

●孝は萬全の本　福岡縣豐後國下毛郡中津町、
字豐後町に住む、松尾勝三郎(六十五)は、去る三十一
年、伊豫の松山より同地に至りて、生計を營みし

縣三戸郡八戸町、
か(二十)とて、容姿
と優しく、一通
の花、一入男の心
甫て、或はたか子
び寄る者多けれど
人が配偶者を求め
座います。何時迄

議の上、伯父某と兩人付添ひ、父を伴ひて上京し、某病院へ入院せしめて、晝夜看護し、其傍らたか子は、神佛に立願して、若し定まれる、運命ならば、妾が命を縮めても、父の命數を伸させ給へと、祈りしに、其甲斐ありて、父は一ヶ月程經て平癒し、目出度歸鄕したるが、平癒は他人に會ふ每に、余が病氣は、藥石の功にはあらねば、醫師のためにもあらず、唯だ子が親を思ふ、孝養の一念ありこと、吹聽し居れる由。たか子は、財產家に生れて、

も拙からざる、手織木に炊事、拭り云。わは辨ずれども、等せんと欲淩々たる節る、北邊の

り、臥褥して、日々薬餌を服しければ、家に稼人なく、生計いとゞ困難に陥り、細き烟も立ちかぬるに至りけり。重市は、幼心にも、最と憂の雲をのばせ、朝夕の手助けをなし、父の看病を怠らざるは、いふ迄もなく、肝腎の糊口の資を、得では叶はじと、日々町に出で丶、菓子を三箱宛賣り明けずば、歸宅せぬ事に定めけるに、其の事情を知りし、市人達は、皆爭ひて、之を買ひ求めしとなり。かく菓

として譽めぬ者な年年は、養父の十四十餘年間、忠勤ものへ、其功を賞したるに、初太家に在て、給料をは、素より此身の賞與を受く可き謂

已を稱せんとする今の世に此主ず身で此僕すら旌表すべきにあらずや。あはれ、人たる者は、たれもかく、あらまほしき、ものにこそ。

○社會片々

●米人の慈善　横濱根岸村、三千百三番地、畑善七(七十五)は、取る年とゝもに、腰は鎌倉海老の如く曲りて、ヨボヨボと爲し居れども、獨身者にて

らくも其日の
七時頃、何
といひつゝ、
ゐる、山下町
キヤレーとい
錢銀貨を與へ
しといふ。我が
みをかくる
しては、獻に

八日より、向三十日間、赤穗四十七義士の爲めに、祭典を修行し、義士の遺物、陳列場を開き、義士の遺物と、諸將校より寄贈したる、廿七八年役の、戰利品をも陳列して、諸人の觀覽に供すると云へり。

●賴山陽に關する書狀　廣島市袋町二百三十番地、賴源次郎氏は、賴家の一族なるが、此頃襖を修繕せんとしたるに、貼り込みの故紙中より、左の書翰出でたりとぞ。

十六年十月東京
したるが、東京
し、多年苦心の
發明するに至れ
術の志を抱き
月頃、歐米漫遊
調ぶる決心なり
に、つくし玉は

造の內緣の妻、吉田ふぢ(三十四)は、本月十三日男兒を分娩し、猿之助と名け、愛しみ居りしが、一昨朝四時頃、乳房をふくませて眠り、同七時頃、起出で見たれば、こは如何に、猿之助は、全く死し居るにぞ、大いに驚き、直ちに、最寄の醫師を迎へしも、皆怪しみて、來診せず、爲に昨日八時頃、同區眞砂町の、有賀醫師より、診斷書を乞ひ、本鄕署へ訴へ出しかば、同署にては、係官出張

し、窒息せし
不注意より、
吾人の耳に
る世の例た
三字夢め忘
先に野中至
りしが、未だ
十七日、英

て登山し、遂に其頂上に達したるが、二合目以上は、降雪氷結し、其の上に雪靴を埋める位に、積り居り、一片の雲なく、爽快極りなかりしと、又頂上は、寒氣嚴烈、呼吸切迫し、息は氷りて、髭に氷垂下る程なりしを、忍んで頂上にて暫く休息し、其れより劍ヶ峯、大日嶽、釋迦嶽をば、寫眞に映して、下降、二日目の午後七時頃、恙なく御殿場に歸りたりと。嗚呼快なるかな、この行、

●幼童寄附の筆頭　宮城縣宮城郡、鹽釜町字横

…りしと、依りて、
…と、掲示したるに、
…も寄附を、申出る
…世の紳士たり、
…の小壺が、赤心
…辯護士ありたる
…ころあらんが、
…及第したる女の

…等も、顔色を失ふばかりありしと云ふ。

○花笑鳥啼

●霞か雲か將雪か　花の都は、漸く花の都らしくあり來れり、料峭たる春寒長く去らず、刀の如き風梢を鳴らし居る間は、花期例年に後るゝこと一週間あらんと、我も人も思ひ居りしが、流石期節は爭はれぬ者哉、此程の驟暖に催されて、櫻の

めば猩臙脂
の風情、亦
島へ杖を曳
間の櫻かな。
迎へんとて、
ば先づ、し
花の季節來
待て、例年

外國人にして、日本帝國の勳三等以上を有するものにて、在東京の向も、右同樣來る六日迄に、式部職へ宛て差出す可しとの、事なるが、各官廳雇の外人は此限にあらずとなん。あはれ、かゝる榮譽に浴する、臣達の、樂しみ如何ばかりならんかし。

●東台の初花　雅となく俗となく待ちかねし、上野の初櫻は、昨今の暖氣におひ蕾を破りて美しく、殊に、清水堂の裏手、櫻ケ岡の邊りなる一樹

秋野井等江戸川
めて、陽々たり
は、恰も、萬丈
して、宛然、人
あらん。
きたれば、東
迄、毎土曜、
壁、兩停車場に
割減をなす由。

を捧献し、拜殿に於て、管絃奏樂あり。徳川家門
等より、種々の献納品ありて、一同參列、宮司祭
文を朗讀し、列席者に參拜を許し、神酒を賜はる
と云ふ。又た境内には、里神樂の奉納もありと。

●上野の警戒　今や、花見に、祭に、追々杖を
曳、人々の、出盛るべきなればとて、下谷警察署
にては、さる一日より、清水堂の傍に、臨時出張
所を設けて、警戒怠りなかるべしと、ありがたき
御代かな。

本年も花見
通者も、隧
見物旁々出
車馬は勿論、
路の場所に
交通止めに、
り、警視廳
特に取締を
[illegible]

もあるべきことにこそ。

●花見茶屋　鳥啼き花笑ふ、好時節となり、掛茶屋の赤毛氈に、景氣を添ゆる、今日此頃、上野公園にある、花見茶屋の、模様を聞くに、園中の茶店は、都合十一軒ありて其の支店は、一軒に就き、二三ヶ處づゝ設けられ、花見客を待居れるが、昨年より睦組とて、無極亭、觀月亭、龍玉亭、遠州亭、東華亭、鶯亭の六軒同盟して、腰掛料一人に就き[illegible]錢、茶菓料等上三錢と云ふことに定め、

設けて一般の縦
一帳、曾我討入
似顔、胴は躑躅
る筈なりと又千
を、植重は同様
其の術の日に進
館にては、今度、
一羽を館内に放

嵐山なとは、其の魁なるものなり。今こゝに、四方の白雲とはいへど、輦下の名所のみなれば、地方の愛讀諸媛よ、親く看玉ふ、花信一筆送り玉ひてよ。

向島は笑はんとして、未だ笑きらず、口のあたり、何となく、動き始めたる、一刹那なり。暖き風の手にて、促がしたらんには、脣を開くも、容易ならんかし。又、品川御殿山より、高輪通りの路傍に、汽車の煤烟、馬車の埃りを浴びつゝある、並

輪二輪宛紅唇
盛りの前に、
尾邸の櫻は、
て手辨當の連
跡片附に、忙
山、淺草、九
なべて、例年
四つ五つ、つ
風晴わり。古

を繋ぎて砂かいわけ、玉を拾ふ興趣ふか〻らずとせず、早きは四月三日より、七日ごろまでを可とすとぞ、尤も初汐と稱するは、同じ月二十九日より、八十八夜前後までなるが、本年は蛤の發生夥多しけれど、必ず相應に獲らるゝなるべし。牡蠣は、殊に多しと、きけり。

●遊船の賃　花見に、汐干に、遊船の好時季となり、來れるに應じ、各遊船宿、及び釣船宿にて、定めてありしも、船賃の相場を揭げんに、

后陛下御歌「み
もへばはてな
り、卒業生、全
し、而して、該
て、告辭となし
性涵養に關する
なはち、
村よね子

をさくは　即ち左の如し（氏名いろは順）

●高等師範學科

福島縣平民	橋本　たけ
山形縣平民	加藤　松代
香川縣士族	蒲生　ささ
富山縣士族	立花　はる
北海道廳平民	建部　よれ
山口縣士族	永地まちゑ
新潟縣平民	村山　いく
福岡縣平民	空閑みちよ
高知縣士族	丸岡　增
福島縣平民	阿部　つる
秋田縣平民	小原みよの
福岡縣士族	梶原　きち
愛知縣平民	吉川　ふみ
奈良縣士族	立野　さみ
長崎縣士族	田島　もさ
佐賀縣士族	永淵まさきよ
石川縣士族	大村　よれ
鳥取縣士族	山崎　なみ
京都府平民	福本　さみ
鳥取縣平民	安藤　さつ

宮川　壽美
鈴木　瀧野
淡　冬
千田にわの
淺野　千賀
吉澤　幸
竹村　千代
村山　つれ
宇野　ちぎ
服部よしな

○日本女學校證書授與式

去にし三月廿九日、日本女學校にては、修業證書授與式を擧げられたり。先づ、勅語を捧讀しまつり、次に、各級總代に證書を授與し、次に、最優等者に賞品をさづけ、それより、西校長の式辭に、ついで、下田講師の演說あり、終に、君が代をうたひて、皇室、國家の萬歲を祝しまつり、靜肅に其の式を終へられたりき。西校長の式辭は、次號

（妖の）

る文

文書式

題　　　　名
住所　姓名
……、……、……。……。
……。……、……。
……、……、……。……
……、……、……。

用紙は半紙二つ折の事。字體は鮮明に記し、且句讀點を施すべし。

○總て文字は分り易き樣、漢字は楷書、假名は普通の平假名にて個々に離して認むべし。

○總て書式に違ひたるは沒書とす。

○女子は、なにひとにても、隨意に投稿することを得。

短歌、今様、新體詩、
書、詩

三

人、今様新體
文章にて一人

金参圓

天賞に同じ
金壹圓五拾錢

天賞に同じ
金五拾錢

以内

歌文投稿規則

一、女子は何人にても投稿するを得

二、各種とも題は隨意とす

三、一人にて短歌は三首長歌今様新體詩文章共各一篇に限る但一人にて各種を投ぜらるゝは差支なし

四、用紙は必ず半紙二つ折短歌は其の片面に三首並べて書くべし長歌今様新體詩は毎號の女子之友に掲載さるゝ體裁に倣ひ一枚二十行づゝに書き文章は各一枚二十行二十字詰に認むべし

五、種類に異にする毎に其の最初最も見易き處に「短歌」(今様なれば「今様」他準之)と必ず記入し又必ず題目の下には自己の住所姓名を明記すべし匿名を許さず若し匿名或は變名と認むべき事實ある時は用捨なく沒書さす

六、文字は必ずしも楷書なるを要せざれども可成鮮明に認め上下左右に餘白を存し各行間には添削し能ふだけの餘白を開け置くべし

七、投稿表包には必ず第四才媛詞藻原稿と明記せらるべし若し月並兼題と併せ送らるゝ際は「及月並兼題」と記せらるべし

寛先生著作

談　總振假名付　正價金貳拾五錢　郵稅金四錢

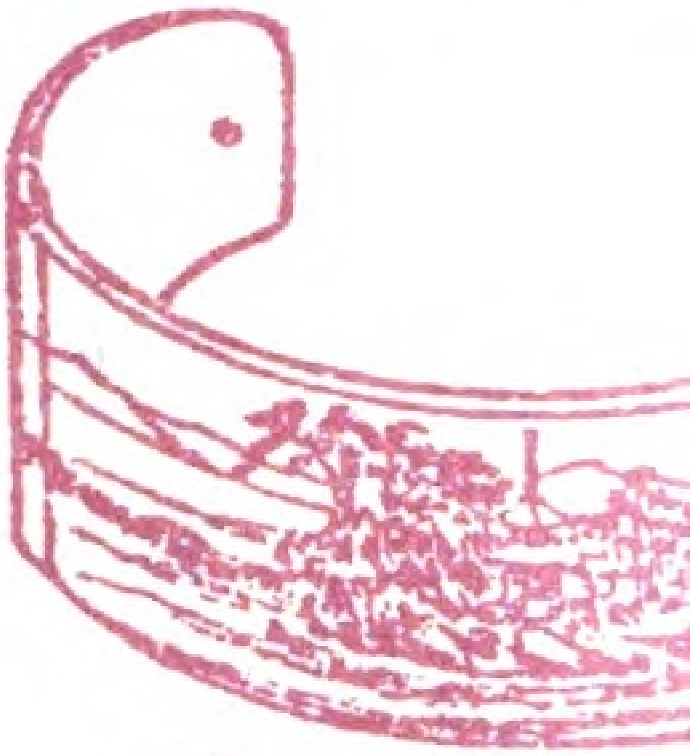
處置　總振假名付　正價金貳拾五錢　郵稅金四錢

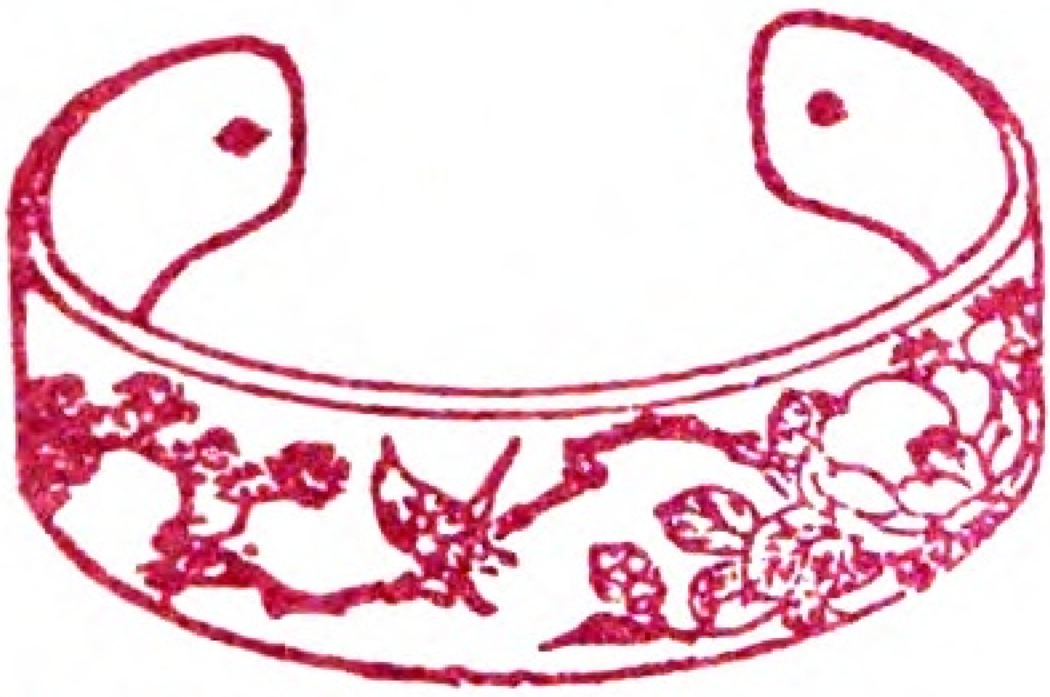
人會教程　總振假名付　正價金參拾五錢　郵稅金六錢

程（看護婦教科書）　正價金壹圓　郵稅金拾錢

教科書　正價金六拾五錢　郵稅金八錢







乙價 卅一圓

●廿二金三匁五分厚肉彫鍛

彫刻

甲價 卅八圓

乙價 卅三圓

●廿二金三匁五分肉彫鍛

ダイヤモンド入

甲價 二百五十圓

乙價 百八十圓

丙價 百三十圓

丁價 九十圓

戊價 六十五圓

巳價 五十圓

●廿金三匁付 小判形 角形 無地印

面指環 十五圓七十錢

●廿二金四匁付 小判形 角形 無地

印面指環 廿二圓四十錢

●純金五匁付 小判形 角形 無地印

乙價 九圓三十錢

●廿金二匁付片切彫刻

甲價 十四圓五十錢

乙價 十二圓五十錢

●廿二金二匁五分片切彫刻

甲價 十九

乙價 十七圓

●十八金三匁付蝶番付三ツ折片切彫刻

甲價 廿圓

乙價 十七圓五十錢

●廿金三匁付蝶番付三ツ平象嵌片ち彫刻付

甲價 廿三圓

乙價 廿圓

◎印材製作篆刻

應貴囑

右の外金製の多少寶石の大小又は彫刻の繁簡精粗により代價に高低の品々あり

貴金屬美術品商

右衛門

電話本局三十三番
長距離電話接續

式會社國光社印刷部印刷